

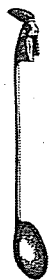
西アフリカの昔話

異類婚姻譚を切り口として

江口一久

漢字がたくさん入った題名で異類婚姻譚を切り口としてということでありませうけれども、異類婚姻譚というのは人間が動物とか、物とか、精霊とか、人間以外の人と結婚するという話であります。人はどうして結婚するかという話を異類婚姻譚を中心に皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

西アフリカというのをご存知ですか？ あまり知られていないのがつらいのですが、西アフリカは時差が日本と八時間から十時間位ある所で、こちらが夜の時、むこうはまだ夜になっていない、朝だというぐあいです。西



アフリカというのは、アフリカの西の方です。西アフリカと北アフリカの間には、サハラ砂漠というのがありまして、非常に重要なのですが、今日のお話には入れないでおこうと思います。西アフリカにある国の名前を上げてみたら、セネガルとかガーナ、ナイジェリア、カメルーン、ガンビア、トーゴ、ニジェールなどがあります。ご存知ない方は結構ですが、お帰りになったら帝国書院の地図帳でもご覧になったら分かるかと思えます。ずいぶんたくさんのお国のある所です。国がたくさんあるだけではなく、たくさんのお国がある所です。いろいろなこ

とばがあるということは、おたがいが理解する事ができないことばがたくさんあるということです。たとえば日本語と朝鮮語といった場合、おたがいくら一生懸命しゃべっても通じないでしょう？ おたがいが通じないことばが計算の方法にもよりますが、約千ほどあります。言語の数を数えるだけでも大変な学問になりますし、まして一つずつ習っていたらえらいことです。西アフリカは、ことばの面からは、おそろしい所だということです。言語というのは、ちよつとずつ変っていくものが多く、

ここからここまでは分かるけど、ここからここまでは分からず、ここからここまでは分かる、この人は分かるけど、この人は分からずと、ちよつとずつ変わっていくものが多いのです。西アフリカでは、一つの場所に三つも四つも五つも、場合によっては五十位のことばをしゃべる人が住んでいるのです。そういう状況を頭に入れて今日の話を聞いていただきたいのです。それから、ここからここがAでここから先がBというのではなく、AやらBやらがゴチャゴチャと住んでいる。西アフリカの人たちの多くは一人で二つ、三つ位しゃべる事が日常

アフリカでは、北の方は雨が降らない。南の方では雨がよく降る。ですから北の方は乾燥しています。北の方は一年間の十月、雨が降らない。南の方は毎日雨が降っている。そう思っていただければいいです。もつと北に行くと雨が降るのは一年間のうち一週間とか、三日間とか、一日しか降らないとかそういう場所もあります。ですから環境は様々で、環境によって昔話はかなり影響を受けると言えるでしょう。

それから西アフリカの話で注目しなければならぬ事は、あちらはどんな事も文字を介さなくて、口で言う社会です。これは、「口頭社会」ともいうべきものです。ですから昔話が〇〇書店から売り出されているというわけではなくて、毎日語られており、非常にたくさんのお話があるということです。ですから、たとえば「どうですか、あなたは昔話知っていますか？」とたずねる。「知っている」という返事があり、その人に「ちよつと話してくれ」と言って話をしてもらったら、五十も六十も話が出てきます。日本ではどうですかね。「桃太郎」「浦島太郎」と「カチカチ山」と、せいぜい十位話したら「も

茶飯事ですが、日本の人は英語がしゃべれるといったら、あの人はえらい秀才だというし、三つ位しゃべったら天才で、五つ位しゃべる人を形容することはないほどですが、これは、ちよつとおかしい。子どもの時から聞いていたら、全部しゃべるようになるわけですが、おとうさんがAという言語をしゃべって、おかあさんがBという言語をしゃべって、家の外の人はCという言語をしゃべる。そしたら、人は自然に三つしゃべれるようになるわけです。

多言語使用を念頭に置いて、昔話の移動を考えてください。Aという言語で語られていても、それが簡単にBという言語に写し変えられて隣に進んでいく。ですから昔話の境界と言語の境界というのは、必ずしも同じではない。昔話はおしゃべりでしょう、どんどん一人で三つ位のことばをしゃべる人がいたら、隣の人におしゃべりをしていく。ことばが違っていても、昔話はどうも移動していく、そんなふうになっていますから、昔話の取り扱いは、ことばの扱いは違うということです。

こういうことがあります。みなさんご存知のように西

う堪忍してくれ」と言う、そういうお父さん、お母さんがほとんどではないでしょうか。でも、その西アフリカでは一人でも五十、六十も話す人がたくさんいます。一人で一番たくさん語って今まで残っているのは、六百話です。日本でも五百話を語ったというのは、あります。日本の五百話語りは百名はいかないと思いますが、むこうの方では、かなりそういう人がいます。ですから、たいへん豊かな昔話があるということです。

昔、『少年ケニヤ』という冒険小説が流行りましたけれども、作者は山川惣治です。あの舞台になっている所がサバンナです。サバンナというのは草が多い所です。そこに象がいたり、キリンがいたり、そこにウサギがいてハイエナが出てくる。こういう景観をしている世界が、あの少年ケニヤの世界ですが、昔話もサバンナで語られる昔話には、登場する動物もサバンナにいる動物が多いのです。

熱帯ギニアの森の中というのは見通しはきかないし、真っ暗ですし、というので、その中に出てくる動物は当然変わってきます。たとえばアフリカで一番小さな羚羊

類はロイヤルアンテロープと言うのですが、背の高さは三〇〜四〇センチ位のシカですが、それが出てくる所というのは、熱帯雨林の一番西の端にしか出てきません。ここでは他の所に出てこない動物が出てきます。

それからコンゴという所は、ものすごい大きな密林ですね。そこにはいろいろな動物がいるわけですが、そこにはサバンナの「少年ケニヤ」の世界とは全く違う世界がありまして、そこに出てくる動物も違っています。たとえば、カメというのが出てきます。のそのとしたカメが出てくるのです。コンゴの密林地帯ではカメが人氣ものなのです。ウサギとカメの話では、かならずカメが勝つという話がありますが、アフリカのウサギとカメの話は熱帯雨林でできた話といえるでしょう。

舞台装置も環境によって変わってくるということがあります。たとえば、服を着てる所、これは服のある所しか服は着てませんし、それから服を着るとい話が出てこない所もたくさんあります。最初はわれわれの先祖だつて服が発明される前は、服がなかったと思えばいいでしょうが、アフリカでも服がない地域というのがありま

ても仕方がないですから、まあ荒っぽい話をさせていた
だきたいと思います。

アフリカでこういうことが言われるのですが、アフリカの昔話には、アンガジマン (Angajiman) があります。まあこれは文学で使われるフランス語なのです。それはどういうことだと申しますと、つまりコミットメントと英語で言いますけれども、昔話が社会と深く関わりをもつということですね。関わりですね、昔話と社会、日常生活、それから信仰、それからかれらの生き方、そういうものと昔話が深く関わっているという事でありまして。これはそう言われているだけであつて、そうでないと思えばそうかもしれませんが、わたしも昔話は何か大事なもので、日常の生活とか人々の生活を規制するもので、なにかかならず関わりがあるのだと考えています。浦島太郎にしても、われわれの感覚では、あれは昔のことで、あれとわたしとは関係ないというふうに考えますが、アフリカの昔話は、今だにかれらの生活と関わりをもっているのです。

たとえば、タブーというのがあります、昔話は夜に

す。どちらかと言えばサバンナ地帯の方が早く服を着て、密林の方が後だと、こういうことが言えると思います。昔話のなかでもそういうことが色々違うのです。

それから、アフリカで北の方は、イスラム教の影響を受けた所が多い。イスラム教徒の人が多い。イスラム教徒つてご存知ですか？ ちょっと前に回々教フレイクと言つて中学校の教科書に書いてありました。回教です。回を中国語では回フレイクと言う。だからフレイク教と言つたのですね。

イスラムの世界では、昔話もイスラムの様々な伝統の影響をうけます。王さま、お姫さまが出てきたり、魔法のカーペットが出てきたり、それから精霊 (Spirit) というのが出てきたりするのです。王さまが出てきて、お姫さまが出てくる。ペルシャのお姫さまとはちょっと感じが違いますが、そういう話が出てくることになって
います。

密林では、海の怪物とか川の怪物とかさまざまな精霊の世界が展開してきます。

今これからお話しするのは、あまり違いばかりを言つ
しか語られませんが、昼に話をしていると「あいつは死ぬ」とか「飯が食えなくなる」とか「貧乏人になる」とかさ
まざまなタブーがあります。だから昔話はかならず晩に
します。

そしてやはりかれらは、非常に真剣に語ります。ですから、その線にそつて考えてみたいのです。つまりですね、社会生活を営んでいくには、いろんな智慧が必要で
す。その智慧が昔話の中にふくまれているというふう
に考えます。わたしは西アフリカの方では、そういう智慧
というのが入っているのだと、それが生き方も左右して
いるのだと、そういうふうを考えるわけです。

桃太郎は桃太郎、勝手にやっつけていけばいい。どんぶり
こ、どんぶりこ、流れて行つたら終わりですと。鬼はや
つつけたらいいと。それだけじゃなくて、それはいった
いなにを表しているのだということ、わたしは最近、
少し考え出しているのです。その一端を皆さんと共に考
えてみたいと、こういうわけです。

昔話というものは、わたしが言つているように、たつ
た一つの昔話というのがあるのではなくて、むしろには、

千ほどの言語があり、その言語ごとに異なるグループがあるわけですが、一つ一つのグループの中で昔話の分類の仕方が違ってはいるわけです。分類の仕方が違うというのは、それは歴史物語であるとか、これは昔起こった本当にあった事とか、われわれの伝説にあたるような事もあるし、こういう事がなぜどうなったかということだけ説明する分野もあれば、かれら自身の分類の方法があるわけです。

さて、西アフリカの物語というと、西アフリカに行ったら朝から晩まで話を聞いているというわけにはいかないですが、夜になれば真つ暗です。電気もなければ水道もない。残念ながら、電気もない所までビデオが入ってきまして、ソニーとかパナソニックとか、それは自動車のパテリーをつないでビデオを見るのです。だから森の真つ暗なところで、突然撃ち合いの音が聞こえたりしてたいへんです。アフリカの昔話を破壊しているのは、日本であるということをおきたいのです。

二十数年お付き合いをしていると色々な話を集めるこ

とも多いのですけれど、だいたい昔話のどういうものがどれ位分布しているかと、ちょっと言っておきたいと思えます。

昔話のほとんど半分以上は、家庭内でのイザコザの話です。

アフリカでは、一人の男が二人、三人、四人、お金さえあれば十人、二十人も嫁さんをもらうのです。北カメルーンのある部落では、観光客に二百人ほどいる自分の嫁さんを見せるという首長がおりまして、全部紹介してくれます。一人一人から入場料を取るといいう商売をしている人がいるのです。アフリカではとにかく一夫多妻というのが原則であります。悪い意味じゃないですよ、一夫多妻制というのは。またよい面もあるのですから。今日は結婚生活の話ですけど、それは一夫多妻制のいい面もあります。たとえば、二人お嫁さんがいれば一人が病気になるっても、もう一人が子供の面倒を見られると、それはある面ではいいことじゃないですか。それから家の前を掃除するのも、半分Aが掃除してこつちBが掃除して、五人いたら五分の一で済むんですか

ら大したものですよ。ですからそういう意味ではいいわけですが、ま、五人のお嫁さん持っていたら愛情というのは平等にいかないですから、AとB、CDEFGとたくさん持っていたら、お嫁さんたちのあいだで愛情分配に不平等が生じてきて、そして、ねたみが起こって争いが起こる、ある時は人殺しにまで発展するのです。それから子どもを巻き込み、おじいちゃん、おばあちゃんを巻き込んで非常に大きな話になってくるわけですが、その手の話が非常に多いのですけれど、あんまりどこにも発表されていないのです。ヨーロッパの人たちが、おもにアフリカの事を研究してきましたけれども、ゴチャ、ゴチャした嫁さんと、嫉妬や何かはおもしろくないと考えたのか、ほとんど発表されていないのです。

また昔話の世界といっても、昔は探検隊が行くような世界だったので、男がたくさん行ったわけです。それで女の人が行ったら、関心持って、きつとそんな話をたくさん集めたと思うのです。男たちは鉄砲持って「おまえ、昔話言わなかったら一発撃つ」というような態度でないにしても、大変高慢な態度をしてきたものですから、こ

の手の話は非常に少ない。ですから意外と昔話全体なかでは家庭内の話が多いのです。今日の話も実は家庭内の話の多少延長でもあるのですが。

あと残りの四〇%位まで動物譚、ウサギとカメと言いましたけれど、ゾウとかカバ、ハイエナとライオンとか、それからツルとヘビなどの話が非常に多いわけです。とりわけ動物の話のなかにはトリックスターの話が非常に多いのです。トリックスターというのは悪賢い、人を騙す動物のことです。日本のウサギがワニザメを騙した話は古事記の話ですね。ワニザメを騙してウサギがトントントンと飛んで行くと、もうちよつとというところで、「お前騙したな」といって捕まっ皮をはがれるというストーリーがありますが、このウサギはトリックスターでして、その手のものが非常に多いのです。

あとの五%か一〇%これはセックスの話が多いです。どうして男と女がセックスを始めたか、とかですね。どうして今の性器が今日の形になっているかという話があるのです。これもまた、ヨーロッパの宣教師らは汚い、本にのせるべきではないとこれもほとんど紹介されてい

ないのです。

あと残りの一〇%位が異類婚姻譚という話になります。

今日はね、じつは結婚の話です。ですから、お嫁さんをもろうとかもらわないとか、その話なのですが、だいたいちょっと次のことを頭に入れておきましょう。どの社会にも、お嫁さんを交換するさまざまなルールがあります。村が二つの部分に分れていて、AとBという所はお互いに交換するところもあれば、原則的には姉妹はめとらないとかですね、それから近い親戚からはもらわないとか、いとこはもらっていないとか、父方のいとこはもらっていないとか、母方のいとこはもらわないとかさまざまなルールがあります。結婚するのだいたいは日本なんかと同じように夫の方へ行って住みます。それから子どもはお父さんと一緒に住むことが原則になるところがほとんどです。

それから結婚に関しては、二つの家族が話し合ってお嫁さんにこつちに来てもらう場合には夫方は、お嫁さんのところに婚資という結納金みたいなものをはらいま

す。実際来てもらうわけだから、向うから労働力も減らし、子どももつくってもらわなきゃいけないということ、それはそれに対する支払いをするわけです。それがまあ大変な量になります。日本の形式的な結納金だけじゃなくて、牛が十頭とか十五頭とか、あるいは毎年、労働にきてもらうとかの婚資贈与ということがあります。それは非常に大事な事なのです。そして離婚した場合には、それがまた、返って来るとか各部族によって風習が違いますけれど、そういう親たちや大人たちの社会が決めたルールがあります。

わたしもある時、まだアフリカを知らなかったころ、ニジェールで「アフリカの結婚式あるから出てこいや」と言うので、さあ、これからは酒はいっぱい飲めるし、ご馳走も出てくるかな思ってたんだ。歩いていたら、真っ暗な野原の中に着きまして、「ここでなにしてるね？」と言ったら「結婚式してんのに分らんのかい」と言っても、黒人が暗い所について分からない。それでもよく今考えてみれば、両サイドに分かれてですね、婚資の贈与をいくらするかということ、おたがいおじい

ちゃんにはいくら、おばあちゃんにはいくらと、いろいろと両者が決定をしているのです。で、その間にグリオーという芸をやる人がいて「これはなんぼ与える事になりました」という話し合いをみなに知らせる人がいるので、それが終わったところに花嫁がやって来て、そしてOKということになるのですが、それから先も詳しく言えば花嫁と夫がいつしよの所に寝る、その時にもまたさまざまな贈与がないと寝られないとか大変なのです。ですから結婚は大変です。

どうですか？ 日本でも簡単にできますか？ 日本も大変でしょう。どこに行っただって社会で決められたルールがあつて、大変なややこしいルールにしたがつて儀礼にもとづいて、なされるという点に注目していただきたいと思います。

のちほど異類婚姻についてはしゃべりたいと思います。が、結婚にまつわる話というのは大変多いのです。

たとえば、これはカメルーンの話ですが、あんまり早いこと結婚したらいけないという話があるのです。

ある所に娘がいました。だんだん大きくなってきました。オッパイもふくらんできました。それでみながこの子を結婚させようと一生懸命になつたけれども、娘は頑として聞き入れなかった。長いあいだ経つた。そこで両親は、もう相手方から婚資をとりかわし結婚の日取りも決めたけれども、どうも子どもは言うことを聞かないし、子どもはおそらく十二、三歳くらいです。そしたらもう仕方ないから、よしっ、ということ、ある日、新郎の方の妹に、こちらの家に遊びに来させて「なんやらちゃん、わたしと一緒に遊びに泊りに行きましょう」と言う。で、そうですかと言つて出かけて行くわけです。どんどん歩いて行くと鳥が飛んで来て「お嫁入り道具は全部運んで行ったのに」「分らんのかな」「気が付かないのかな」「あんた今、お嫁に行くんやで」とこういう歌をうたうのです。すると娘はその連れに聞きます。「あれはなんや？」と「あれは、どうということはないから聞かんほうがいい」と言う。鳥は何回も言うわけですが、それを聞かせないようにして相手の家に行く、そして着いてみたら、

よく見たような家財道具が並んでいる。「おかしいな」「いやこんなのは、前から置いてあるんやから心配しんでもいい」と。

それから物語は、細かい事は言わないけれど、長い間、そこにいる間に子供ができて、そしてある日、娘であった人が若いお母さんになって、井戸に水汲みに行って帰って来ると自分の旦那が子供をあやしなながら「バンガーマ・アンダー・トゥートゥー (Bungama andaa, tuutu)」とうたっていると、それを聞いてよく考えてみる。と、わたしは、あの時にいやだと言ったのに結局騙されて結婚したんだ、という事に気がついて野原の中に逃げていって、そのまま身をかくして死んでしまいました、とさ。

このような話があるわけですが、これなんか十歳くらい、あるいは六、七歳で親たちが結婚相手を決めて、結納金をもらって、そして娘はそのために大事に育てて、そして六、七歳になれば相手の所に連れていって、まだ性生活とか全々分らないけれども、しばらくして相手

の家族という間に、自分の夫となる人とお互いが成熟してきて子供をつくる。そういう昔の習慣があるんですが、それはおかしいことで、本人が納得して結婚しなければならぬということを教えている物語なのです。

また、こんな物語もあります。日本で自分の娘が結婚すると言ったら結婚式の披露宴で泣くお父さんがいます。また、いずれは自分の娘も結婚すると思つたら「今から泣ける」といって泣いてるお父さんもいるくらいです。それは深層心理学というむずかしい話になると思うのですが、自分の娘を嫁にやるのがいやで、出口のない小屋の中へ入れておくという話があつて、そしてそれがそんな所に入れたおかげで最後は、子供がハイエナに食べられてしまうという話があります。この手の話なんかはたくさんあるわけですが、そういう話は何を意味しているのでしょうか。

ほかに「手なし娘」という有名な話があります。

お兄さんが妹に結婚してくれと言う。妹は「わたしは困る」と「いや、おまえ以外はかなわん」と、そ

して妹が川に水浴に行ってる間に服を全部とってしまふんです。そして他の妹の友だちがみな川から上ってくる。と、みな服を着るんですが、妹のものだけない。

その兄さんは、木の上において「おまえが結婚してくれないのなら服は返さない」などと言つていじめるのです。しかし頑として妹は言う事をきかないわけです。

そのうち、そんなに言う事をきかないのなら「おまえの手を切つてしまふ」と言つて、本当に切つてしまふのです。手を切られて自分の友だちと逃げて行くわけです。そして、逃げて行くと、ある国で王さまにもらわれるのです。王さまはちゃんと自分の目で相手をみて嫁をもらうではありません。王さまは、たくさんの嫁さんもちたがり、手なし娘とその友人ももらつてしまいます。ところが、その王さまのたくさんいる他のお嫁さんたちが「あなたのような立派な王さまが手のないお嫁さんをもらうのはおかしい」と、「あんな者は殺してしまわなあかんのや」と。それを聞いて王さまはある晩に「それじゃ、あくる朝、みなここに集まってみよう」と、「あくる朝、みなここに集まるよ

うに」という命令が出た。その晩に自分と友だちが二人ですつと逃げて行くのです。塀を乗り越えて、どんな遠いところまで行くと、大きなヘビが出て来て「おまえはわたしが恐くないか」と言えば「恐くない」と言う。「それならわたしの口の中に飛び込め」と言うので、手のない娘が飛び込むのです。で、飛び込むと今度は手が生えてきて、もうピカピカの体になって、しかもたくさんのご褒美をもらつて帰ってくるわけなんです。自分の友だちもきれいになって帰ってくる。で、あくる朝、王さまのところに出て行くと、もうみんながびっくりしてしまつて、王さまは残りの女を全部追いつけてしまつて、そして、そのキレイな人と、その人の友だちだけ家においた、とさ。

話はそれで終わりです。でも単にこれだけでは、この話はなんの話か分らない。実は、このヘビというものが、ほくは今の考えですけれども、男性性器のシンボルだと思ふんです。つまり、はじめは女性が結婚して大変な目に合うわけですが、そのうちにお互い素性が分かつて円

満な結婚生活に導かれるという話だろうと思います。これは、これからまた、いくつかの方法を考えて分析してみたいと思います。

もう一つ、よく似た話で、「ヘビのお嫁さんになった娘」という話があります。

あるところに、ヘビと結婚した娘がいます。大蛇はひじょうに親切で、毎年たくさんのお母さんを嫁さんのお母さんの所にやるのでした。それを、どんどん何回もくり返しました。くる年もくる年もやりました。そこで娘のお母さんは、「あんたの旦那の顔をぜひ見たい」とこう言うのです。最後に「贈り物をあげるからひとまずお帰りください」と言うのですが「おまえの旦那の顔見るまでせつたい帰らない」「帰ったほうがいい」とお母さんも言う。「いや帰らん」と言う事で「それじゃええか」というわけで真赤な大蛇がウワーッときて、その嫁さんの家をぐるぐるっと囲んでとぐるを巻いて、今度はそのお母さんの腰にひざにずうっと顔をもつてきた。それで、お母さんが「こわい」と言っ

でしまったのさ、これでおしまい。

これは、五十歳位の婦人が話したのですが、昔話にはそれを語るそれぞれの理由があるんです。全てこういうものには慎重な意味があります。どうですか？ ほとんどの家の嫁さんのお母さんの顔はあまり見たくないけれども、まあ、そういうことですかね。それと深く関わっているのです。ですから今、挙げてみたのは、全て結婚とということでありまして、結婚と性とか結婚生活とか、そういう事に関わる話が多いのです。

今日の話題として提供したいのは、異類婚姻譚ということでありまして。異類婚姻譚と言いますのは、他の人と他の動物、木とか精霊とかそういうものをお嫁さんにもらうとか、旦那にもらうとか、そういう話です。西アフリカで顕著なのは、このタイプの昔話です。一つは男が異類をめとる話。一つは女が異類をめとる話です。男が異類をめとる話にはだいたい野獣の復讐という話が多いのです。もう一つ、女が異類をめとる話には美男子が好きな女の話が多いのです。おそらく異類婚姻譚は、この二つの話に分かれると思います。それから今日、狩猟な

たとたん食べられてしまった。

これは上手に話したらすごくおもしろい話なのですが、種あかしをしておきましょう。だいたい昔話にはコメントというのか、これは実際こういう意味だよ、と言って語り手が話してくれる場合が多い。ある地方では、これはモバ族というトーゴの北の方でとった話です。それによると、そういうわけだから、自分の娘がどこかに嫁げば、娘のむこが贈り物をしてくれるわけだから、娘の嫁ぎ先に行って自分の目で娘婿の姿をじっくり見ようなどと考えてみてはならない。義理の息子は義理の母の尻の穴を見てはいけないし、義理の母も義理の息子の尻の穴を見ようとしてはならない。女は体を洗っていると、男はその女のうしろを歩いてはならない。この話の中で娘の母親は、娘むこの姿が見たかった。彼女は恥を知らなかったのだ。娘むこは彼女に自分の本来の姿を見られたので恥ずかしく思った。もしも大蛇が彼女をそのまま家に帰らせていたら、彼女はあとでこの大蛇のことを恥ずかしめるだろう。だから大蛇はこの女を飲み込ん

どが行われていない場所には、その両者が混合したような話が見られます。野獣の復讐というのは、狩人が野獣をたくさんとりすぎて、このままだららたら獣が絶滅するので、動物たちは狩人をこらしめなければいけないといつて、それじゃいい考えはないかといひ、雌の動物が「まかしとけ」と。「わたしが美人に化けて、狩人の秘密をさぐり、どうして殺したらいいかさがしてくるから。それでどうやるか」と言ったら「結構です」という話が、野獣の復讐の話です。

それから美男子が好きな話というのは、非常に簡単な話で、きれいな娘がいた。いろんな人が結婚してくれとくるわけです。「お願いいたします」と。「あんたはちょっと腹がへこんでる」とか、「結婚してくれ」言うたら「おまえのすねには傷がある」とか、「あんたに傷痕がある」とか、「それでは困る。わたしは完璧な男性が好きなの」とか、「きれいなツルツルの肌をして欠点のない男がいい」などと言うのです。話によっては「結婚してください」と言ったら「尻の穴のない人と結婚したい」と言うのがあって、やってくる男の尻をめくってみたら「ある

じゃないの、わたし、尻の穴のない人と結婚したい」と話をこたわるので。

日本でもよくあるのですが、怪物と結婚するとき、むこさんが「飯を食わん嫁はんでよう働いて力持ちで器量はようて顔はきれい、それでいかなものか?」と言ったら、そういうのがやってくるわけだね。そしてご飯は食べない、旦那の前では。それでも旦那が出ていったらガーアと頭からこんな大きな口を開けて家にあつた食い物をザ、ザ、ザアと食べてしまふという話があります。そういう、ちよつとありえない話を持ち出すと、そういうものなのであります。

この野獣の復讐の話をしてみましょう。これは、モバ族というところの話です。これは、いろんなものがありまして、似た話がたくさんあるのです。ちよつとずつ違うのです。同じだと言えば同じだし、違うと言えば全部違うのです。書かれたものがないのだから同じ話でも百人話したら百種の話ができます。どれが、どの話と言われたら、えらいことになるのですけど、これはモバ族のところとつてきた話です。そう覚えていってください。

ということ、どこで捕えられたんだと搜したところ、その狩人の家の入口に自分の子どもの頭蓋骨だけがぶらさげてあつた。「ああ、こいつに殺られたんだ、よし復讐してやれ」ということになりました。

その母牛はある時、きれいな女の姿になってその男のところへやってきました。男は見たとたん「わたしのお嫁さんになってください」と言いました。どこでもアフリカでも助平なのです。実はそれが生命力の大事なことなのです。きれいな人を見たら感激すると、それがなくなつたら人間だめなのです。この人も「わたしのお嫁さんになってくれ」と言つたら、思った通りですということ「なりませう」とお嫁さんになるわけ。それでも「ウッシッシ」ということで生活していたわけですが、だんだん家の様子が分かってくる、この狩人というのはいたいすごく超能力を持つ者と考えられておりますが、そりゃいろんな事知っていなければ狩人になれないですね。それで「おまえはどのようにして狩をする?」と言つたら「わしは、いろんな魔法を知ってるから狩ができるんや」

ある村に一人の狩人が居て、その狩人がお母さんといっしょに住んでいて、毎日、狩をしてきてたくさん動物をとつてきて、それをご近所の方も分けて食べるという生活をしておりました。ある日、男友だちと「今日は狩に行こうか」と出かけて行ったのだそうです。そして出かけて行くと「今日は野牛をとりに行こう」と森の中へ出かけて行きました。牛がいました。そのうしろの方に小さい子牛がいました。それでよく見ていると母牛がどこかへ行きました。子牛だけが残りました。だからそれをねらつたところ、このごろの話には鉄砲もたくさん出てきますが、昔は弓であつたり、槍であつたりしたのでしょうか。バッタリと子牛が倒れました。それで肉をとつて持って帰ろうとしましたが重たすぎるから、半分しかもつて帰れなかつた。でも、頭と体を持って友だちと二人で家に帰ってきました。そして皆で食べました。

ところが、野牛は帰つて来ると、自分の子どもの肉のかけらがあるだけで姿は見あたらない、さあ困つた、と。それで「それじゃ野獣がおそつてきたらどうする?」と聞くと「わたしはおそつて来た時は草に変身するんや」と「草が相手に倒されかけたらどうする?」「木に変身するんや」と「木が相手の動物に倒されかけたらどうする?」「今度は「小屋に変身するんや」と「小屋がやられかけたらどうする?」「今度は「砂に変身するんや」と「砂がやられかけたら?」と言つたら「わしはクバル(Kubal)に……」というのです。そこでお母さんが息子に「おまえ、そんな事言つたらいかんやないか、口をつつしまないかんやないかい」と。「クバル」で止めたのは、お母さんは息子の身に危険がせまるのがこわいので注意したのです。そこで、息子はだまる事になったのですが、お母さんは、それまでに家の中のモロコシつまりコーリヤンを粉にして水で溶いてそれを家に置いてあつたお皿にもつて置く。そうするとそれにひびが入ってきた。「あつ分かつた、あの女はあれは人間やない」とお母さんが発見するので。お母さんは、もうやきもきしながら息子と嫁の会話をきいているのです。それでころあいをみはからつ

て見て「クバル (Kwal)」で息子に話を止めさせるのです。

それである日、娘は「自分の父親に紹介したいから一緒にわたしの親元までついて来てくれ」と狩人に言うのです。狩人は鉄砲持って、槍持って、ナイフ持って準備をしていた。「そんなの止めてくれカッコ悪い」と、「わたしの親元にそんなの持ってきてもらったら困る」とそれを全部止めさせるのです。

他の話では犬をつないであつたら犬を「わたしは犬の肉が好きや」と、夫に犬を殺させ、食べる事もありますが、このモバ族のところでは、武器は困ると手ブラで行かせるのです。

そして、どんどん行く。野原の真ん中まで行ったら「ちょっと待ってくれ」と「今、すぐもどるから」と言い、木の後に行つて今度は野牛の姿になって走つて来る。そこで彼は草に変身するのです。それでも野牛は草に変身したこと知ってるから草を倒そうとする。今度は木に変身し「また木に変身したな」やつつけようとする。すると今度は小屋に変身するわけ「小屋も

親は「おまえがどんな美しい娘を見つけてもその娘が人間か獣か分らないうちは秘密をうちあけてはならない」と言った。そういうわけで母親が言うことを子供は聞かなければならないことさ。おしまい。

これは、十七歳の若い青年の話であります。ここでは要するに美女の化けものと母親か父親が結婚するなど言うのです。年寄りが見破るのです。相手の素性を見破つて「いや、そんなことない。そんなことない」と。先程のあの話は、娘が粉をまぜたものにひびが入ったら、また水を混ぜてひびを隠すという話もあるのですよ。それから必ず最後に秘密を言いかけたら、お母さんが止めるのです。後は糞とかカニに化けて助けられるとか、自分のところの犬が助けにくるとか、これはサバンナ地帯に多いタイプの話です。そういう事をして無事に助けてもらう。

もう一つ美男子が好きな娘の話というのがあります。そういう方もここにおられるかどうか知りませんけれど、いくらそこそこの男性があらわれても、わたしはも

やつつけよう」と言うんで「ドゥッ」と突進してきたら「これはいかん」と言うんで今度は砂に変身する。「砂に化けたんだ」と突進してくるときに今度は針に変身するのです。実は針というのはクバル・ピエヌ (Kwal pienu) と言うのですけれども、クバル (Kwal) だけのところで止めたのです。その母牛は考えて「クバル」は何やろ、「クバル」は何やろ」と言っている間に針に変身して、牛のしっぽにパツとくっついてそして牛が糞をしたその糞の中にポトツと入ってしまつて、身を隠す。その牛はあちこち巡つたけれども「クバル」というのは考えられないから、あきらめてむこうに行つてしまつたと。そして難を逃れることができました。そして家に息子が帰ってきました「息子よ、いったいどうしたのだ？」お母さんがたずねると息子は「母さん、こんなことが起こつたのだ。もし母さんが「クバル」と言いかけたのを止めてもらわなかったら、今ごろあいつに殺されてしまつていたさ。あれは、野牛で人ではなかつたのさ」と言つた。

ここからはコメントなんですけれども、さきほど母

う少しましなもの、もうちょっとカッコいい若いのを、資産のあるせめて家持ちとか、地位もある、もうちょっと待ってみよう。まだわたしも若いと思つておられる方があるかもしれん。そんな人は、西アフリカにもいるのです。この娘のところには、いろいろなものが出てくる。川の砂が化けたり、ヤシが化けたり竹とか精霊とかへビとか死体が化けてやってくるのです。それが完璧な身体をしてやってくるのです。完璧の理想というのは様々な社会によつて変わってきますけど、きれいというのは体とかスラッとしている。そういう姿になつてやつて来ます。で、それを見て娘は一目ぼれをして親の言うこともきかず飛び出して行く。そして野原に行くとな性を表わすわけですから、服を着てる者は服を一枚ずつ脱いでいく。そして最後、裸になつてパツと変身して元のまゝになつて、アタックしてくるのです。しかし犬とか弟とか妹とかそういう人達によつて助けられる、とそんなふうになつて居るのです。北カメルーン・フルベ族の話をしてみましょう。

ある所に娘がいました。たくさんの男性が言い寄って来ましたが「わたしは傷がない男でないと困る」と言うのです。フルベ族は刃で身体に傷をつけたりするのです。そういうものがない人でないと困ると娘が言います。「そうか」と。

そうすると野原に居るハイエナが人間に化けてきれいな男性になってやってくる。そして一目ぼれをして「わたしは、この人と結婚をする。お母さん最愛の人がきたんや」と。「おまえ、注意しろ、完璧な人はないんや」「そんなことはない、完璧な人が来たんや、見てみい」と言って結婚するわけです。結婚すると言っても結婚するということばは、おかしいのだけれど親の言うのもきかずに結婚しても結婚じゃないのです。同棲しただけ。一緒になっただけの話で、実はなんの手續きもなく自由恋愛をして、一緒になっただけの話です。しばらく一緒に住んでいたけれど変な事が多い。旦那に植物性のを食べさせようと思って肉しか食べない、おかしいな、と思うのです。野原へ旦那の実家へ出かけて行く、どんどん歩いていく。そ

もしろい。どんな名前かというたとえば、一ひき目はホビロ・ホビロ (Hohilo hohilo)、「二ひき目がホビ・サガール (Hohi sangalo)」、「三ひき目がサン・サガール (Sang sangalo)」、「四ひき目がウィリタ・ジュータ (Wilita juita)」、「五ひき目がバツジョマリー・チャカラタテ (Bajo maayi caka tadde)」と言うわけ。犬は「ああ、御主人様が呼んでる」「ウンばかり言うな」「ガールと大団士がケンカしたりするような描写もある。『そんな聞こえる訳あらへんやんか、ワン』。そしてそこにハイエナが木の下に入ってきて「おまえ、血一滴も残さんようにして皆食ってしまおうさかい」と言ってそこを握る。すると娘が「ホビロ・ホビロ」と呼ぶ。すると犬は「イヤァッそんな事はない」「イヤァ、あれはそうだ」ということで犬のやりとりが実におもしろい。だんだんとヤシの木が倒れかかっています。もうちょっとで危いところで、もう一本針を出して投げるとパーとヤシの木が出る。そっちのほうに飛び移った瞬間にこちらの木が倒れてしまします。

うすると「ここは見たことあるか」「見たことある」。「ここはどうや?」「見たことある」とずい分家から離れた野原の真ん中に来ました。野原で変身することが、非常に重要な意味があるのですが、家の中では変身しない、野原で変身する。文明から遠ざかった野原というのはひじょうに重要な場所です。そこで「ちょっと待って」と言ってみこうに行ったら変身してやってくる。「ほう」と思ったら、もうハイエナになってドゥッと走ってくる。

そこで娘は大事な事があつたらこれを抜きなさいということ、お父さんからもらった頭をといたりする時につかう太い針をパツとなげると地面に突き刺さって、これがパツと大きなヤシの木になるわけ。そのヤシの上の方に彼女は登るわけ。そしてその一番上の方に行って自分の家の方にむかって飼っている犬を……実はいつもお母さんが注意しなければいけないと言って、鎖につないでいる犬を娘が外に行くときは、草のひもでつなぐんです。

その犬の名前を呼ぶのです。この犬の名前がまたおそこでもまた、犬を呼びます。そうすると今度は犬がやってくるわけです。そしてハイエナをバババと食べて、そして娘は降りてきて一番大きな犬の背中のつて家まで帰ってきました。

これは、ひとつのヴァージョンです。それから今書いている本にあるモバ族のあいだにも、この手の話があります。部族が違っていたら話の構成の仕方が違ってきましたが、基本的には全部異類婚の話です。同じ筋のものです。紹介してみましよう。

ある所に、美しい娘がいました。村の若者たちがその娘に言い寄ったけれど、娘はその申し出を断っていました。何人来てもだめだった。そこで死人が墓地から出てきました。死人はキバシウシツツキの色を借りました。

死人はまた、大蛇の光沢も借りました。死人はハタオリドリの首についている首飾りを借りました。死人は大変美しい男になると、娘のところへやってきました。

た。娘は例によって「うれしい」というわけで一緒に
なり、自分の小屋に入れる。

ところが、お母さんは粉をねって置いておくとそれ
にひびが入ったので、あれは人間ではないということ
が分かるのです。でも、そんなことを娘は聞いてくれ
なくて、「いっしょにこの人の実家へお嫁にいく」と、
お嫁入り道具を持ってでかけて行く事になりました。
足の不自由な妹がヒョウタンの中にカポックの実を入
れておきました。そしてどんな二人が出かけて行き
ました。どんな野原の真中まで出かけて行きました。
そしたらそこにハタオリドリがいました。そのハタオ
リドリが「私の首飾りを返してくれ」と言いました。
男は首飾りを返しました。それからどんな歩いて行
くと、白い樹液の出ってくる木がありました。その木は
「わしにその娘をくれ」と言いました。男は「わしは
おまえのためにこの娘を連れてきたのではない」と言
いました。「それじゃおまえに借した背だけを返して
くれ」と言いました。返すと男は背の低い男になりま
した。二人はまた歩いて行きました。今度はキバシウ

しておりましたら、食べ物も出てくるけれど、食べる
気がしない。ふと自分の持ってきた嫁入り道具のなか
を見てみるとカポックの実が入っています。カポック
というのをご存知ですか？ パンヤの木です。その種
をパッと地面になげると大きな木になります。ワアと
よろこんでその大きな木にのぼって行きました。

そして木にのぼって「カポックの木よ飛んで行け」
「お母さんの家まで飛んで行け」と言うと、そこへ死
人がやってきて「飛んだらいかん、飛んだらいかん。
木はそこに止まっとれ」と言うんですけれど、娘が「飛
びなさい」と言うと木は飛んで、実家までとんで行く
のです。それを足のわるい妹が見ている。木が実家に
おける。妹が「お母さん、お姉ちゃんが帰ってきた」
という。「いやあ、あの子は帰ってくるわけがない、
もう死んでしまっている」、「いやあ帰ってきた、見て
みい」と言ったら、大きな木があるから、「木よ木よ
低くなれ」とお母さんが言った。木は、スーッと低く
なってお姉ちゃんは、帰ってきましたと。そういう事
で娘は無事帰ってくるわけですよ。ここでそのコメン

シツツキのところに行ってきました。「キバシ」とい
うのは口ばしが黄色くて牛をつついていてる鳥がいるん
です。キバシウシツツキが「ぼくの借した色を返して
くれ」と言う。と男は色を返しました。男の体の色が
変わりました。今度はどんな歩いていくと大蛇のと
ころにやってきました。大蛇のところに行ってきました
「おまえに借した光沢を返してくれ」と言いました。
そして光沢を返しました。

どんな歩いていくと墓場がありました。墓場の中
に男は入っていきました。娘が「わたしは入らない」
と言うと無理矢理に嫁入り道具を墓場の中を持って行
きました。娘は仕方なく墓場の中に入って行きました。
墓の中にはたくさん死んだ人が出てきてあいさつしまし
た。死人たちは歌をうたいました。「美男子を選んだ」。
「おまえは美男子を選んだ」。「おまえは生きている人
をこぼんだ」。「おまえは死者のところへ嫁にきた」。「お
まえは美男子を選んだ」。彼らは、同じことを何回も
くりかえすのです。恐ろしいことが増すのです。

そんな事があって、その墓場の中でしばらく生活を
トがあるんです。コメントは後から言う話と同じなの
ですが、解釈と関わりがありますから、ちょっとかれ
らのコメントを紹介しておきましょう。そういうわけ
だから、妹や弟が盲目だったり、啞であつても、お前
はその弟や妹がわたしの弟や妹じゃないと言つてはい
けないのさ。この物語は妹が姉を救ったわけだ。おま
えは娘で父がだれかと一緒になれと言つたら、選り好
みせずにはその人と一緒になるべきだ。もしその
相手がいやなら後にも逃げ出せばよいのさ。選り好
みしたりでもすると、この物語のように人でないもの
がやって来るといふことになるかもしれない。ひよつ
とすると、その相手は木であるかもしれない。娘とい
うのは勝手なことをしても結局、良い相手にはあえな
いだろう。そのうちにみなお前の事を嫌ってしまうだ
ろう。

そういう話がたくさんあるのです。こんな話をどう考
えるかという事でありますが、もう頭の良いみなさんは、
そんなの非常に簡単だと言うっておられるだろうと思

いますが、まず最初に美男子が好きな女の話というのは、やはり現実を見つめるという話でありました。それから両親がちゃんと決めたところに行きなさいということですが。一番最初に昔話はすべてその社会のいろんな事を教えていると言いましたが、社会生活と密接につながりがあるということです。自由気ままに恋愛をするよりも。結婚は、やはり結納金を納めたとか社会のさまざまなルールを守って下さい。そういう話にも考えられるし、それから傷がついていない人なんかいないということでもあります。やっぱり人には、何か欠点があるのだという事です。もっと他の話のなかには「帰ってきてまた、普通の男と結婚しましたよ。そして子供をつくって幸せに生活しましたよ」とあります。

もっと深いレベルでものを考えてみたいと思います。アフリカ人は人間が自然であるということを一歩嫌がるのです。それはみなさんも嫌でしょう。たとえばわたしたちは髪の毛を切るということは自然でないのです。自然に逆らっているのです。自然とは髪の毛がボウウウのことです。それでこう切ってるわけですよ。それが

ら自分が話をする時の目上の人によってはちょっと遠慮して話しているでしょう。それは自然ではないからです。自然なら言いたい放題、やりたい放題です。それはわれわれは、自然をコントロールしているのです。それは文化があるからです。

それからモバ族のところでもツルツルのキレイな人が出てきましたよ、というのがありましたけれどモバ族のところでは刀で体中に瘡痕かさあとというのをつけます。ものすごくたくさんついている。私は美しいと思うんですが、物語の中の娘は「なぜそんなものをつけるの?」と言ってただをこねる。

あるいは、フルベ族というのは割礼をします。割礼をご存知ですね? ペニスの一部を切りとるのです。

それから女性の性器に傷をつけるものもあります。それをなぜするかということです。それは野性ということ、つまり、自然のまま醜いという思想なのです。そうです。すね髪の毛を切るのと同じ思想ですね。

ですからですね。そんなツルツルで自然のままの格好の人が出てくるのはおかしいということです。

あるいはまともな人間なら、労働してる時に手を切ったり、体に傷がつくのは当たり前ではないですか。自然で何にも傷がつかないというのが、おかしいのですよ。だからそういう文化を持ちなさい。そういう社会生活をしている人と結婚しなさい。野性ではなくて文化を持った人と結婚しなさいという話でありましょう。

それからもう一つ、さきほどの女が化けて男と結婚する野牛の話がありました。それはなにを示しているのでしょうか。お母さんが言いましたね。「自分の秘密は絶対明かしたらいけませんよ」ということですね。アフリカ人のたくさんの部族のなかのあいさつに「神さまがあなたの秘密を守ってくださいますように」というあいさつがあります。それは何でしょうか? これは現代社会でもそうですよ。みなさんね、たとえば今「エイズ」というのがあります。これは、たいへん恐れられている、それがあるということが欠点であります。これは、個人の秘密であります。それをもらした途端、あなたはおそらく職を失うこともあるでしょう、嫁さんも失うでしょう。どんな事があるか分からない、だから自分の秘密は

絶対他の人に言ったらいけないということです。

アフリカの昔話で頭蓋骨が落ちていて、そこで「なんやおまえその頭蓋骨?」「おまえ、わしにそんな事、聞かんほうがいい、なんでそんななつたか聞かんほうがええ」と。「いやわしは聞きたい」ということで聞いたたらその人もまた頭蓋骨になってしまふというのがあるわけです。いらぬ事をする必要がないのです。自分の秘密を他人に明かしてはいけないということです。フルベ族のほかいくつかの部族にはこういう話があります。

女性が男性のところへお嫁にくる。一人の男が三人、四人の女性をもらうわけです。また、子供はお父さんのものです。しばしば離婚します。で、お嫁さんはまた、他の男のところへ行きます。で、子供を旦那のところにおいておくでしょう。というわけで女の人は男の間をぐるぐる回って行くのです。

妻とか夫とかそういう概念ではとらえられない世界に、アフリカの人たちは住んでいて、妻と夫ということばがないところが多いのです。ただ女と男ということば

があるだけです。それで一人の夫が何人もの女を持っていたりするわけです。そうすると、なにが起こるかというと他人の嫁さんを盗んだり、嫁さんが愛人と自分の命をとったり、さまざまなことが起こります。それで結婚の理想は、男と女が一体になるとかいう話ではないのです。

アフリカの教訓にこういうのがあります。「野原と川と王さまと夜と女とは、信じてはならない」。野原というのは何が出てくるか分からない。川というのはいつ増水するか分からない。それから王さま、王さまには絶対に秘密を言ったら何が起こるか分からない。それから女、女だけは信用してはならない。そしてそれを信用したために、命を落したという話がたくさんある。これはまあ、男性中心の社会であります、とにかく自分の身の安全のために秘密というのは守らなくてはならない。

それが一番近いと皆さんが考えておられるような自分の嫁さんというような人にも秘密を明かしてはならない。昔話のなかでも、そういうものも教えているのではないかと思えます。

離が離れていても、そこまで話は到着するだろうし、むしろへもこつちから行っただろうし、そんなこと少しもおかしいことはないのです。一日一歩歩いて行っても、千年位たったら、結構、進むんではないですか、そうでしょう。だから、その話が一日一歩歩いて行っても、アフリカに行って、また帰って来たって別におかしい事はない。長い間の歴史、風土の中で育てられたということによって、いろんな変化が生じてきます。わたしは原形というのは、動物と人間とのやりとりというのは、アフリカに近いもので食うか食われるかという話だったと思うのです。そのうち日本が農耕を始めて食べものは十分あると、そしてツルが飛んできたらエサをやるということはないしろ、ツルをとって食べなくてはいけなく、そういうことにはならないような状況になってきた。しかも仏教の伝来とかですね。なにか良い事してくれた人には、報いなくてはならないとか、そういう考えが入ってきたり、いっぺん死んでも何かに生まれ変わって生命が永遠に続いていくと考えるのです。さまざまな思想の影響を受けて、今日、このような話になったと思う

時間になりましたから、日本との比較というのをしておきたいと思いますが、日本のは食うか食われるかという話ではないんです。何でも淡泊なのです。カメを助けてやったとか、ツルを助けてやった、きれいな嫁さんになってやってきました。その男は一銭もお金のない貧しい人でしたから、お嫁さんをもろう結納のお金もありませんでした。その日の食べ物にも困ってました。だから、わたしがきてお助け申し上げましよう、いらないことやらなくてもいいのに機を織ってね。それでその体の毛を一本ずつ抜いていくと……こういう美しい話です。

ところがそれにも関わらず、旦那さんが見たらいけないというのに見てしまつて、残念ながら本性見られて雲のかたへ飛んでいく。それでおしまい。

話のなかでは、それ以外何も語らないというそういう淡泊な話です。

アフリカの話と日本の話で同じ話がたくさんあります。それはなぜか？ という人間が始まつてから、今まで語りはずつとやってきたのです。だからどれだけ距離

のです。日本では仇を返すために来るのはほとんどなくて、恩返しにいくのが多い。そういうのが日本の特色であるということが分かります。なぜこれが日本の昔話の特徴であるかというのは、比較のおかげなのです。

西アフリカのものを見るとか、東アジアのものを見るとか、外の昔話なんかも比較しないと、日本の日本人の精神構造というのもよく分からんということになるのではないかと思えます。

〔本稿は一九九一年五月二十七日、当研究所主催で開催された連続公開講演会「アフリカの民族と文化」での講演を収録したものである〕

(えぐち かずひさ・国立民族学博物館助教授)